

Bob Dylan

デイラン・イン・ジャパン

その魅力と言語の壁

ポール・スワンソン

ボブ・デイランはいまだに日本では「フォークの神様」として知られている。しかしそれは、モーツァルトを三歳のときからピアノが弾けた天才児としてのみ捉えるようなことで、アーティストとしてのデイランの一部しか捉えていない。そして、今回の二〇一〇年日本ツアーでのパフォーマンスは、「フォーク」の一かけらもない、強烈なハードロックの連続であった。音声とコトバの波に圧倒され、津波に押し流されるような体験であった。ここ一〇年間の新しいアルバムが好評であったことの影響があっただろうが、今回のツアーの演奏でやっと「フォークの神様」としてのデイランから解放され、日本でも「脱神話」が告げられたような気がした。

私は一九六〇年代からデイランのファンであり、デイランと

ともに人生を歩んできたといっても過言ではない。そして私にとってもっとも重要と感じたのは、「歌詞」の魅力であった。その多彩な表現、コトバとイメージの連想、人間の奥深い感情や矛盾する体験を表示する多くの名言、これはデイランの真髄としてこのころのなかに刻み込まれてきた。また、毎年ボブ・デイランがノーベル文学賞に推薦されることも、この歌詞の内容とその広い社会的な影響に基づいている。

しかし以前から不思議に思われたことは、その歌詞が分からなくても、あるいはあまり重視していなくても、日本に多くの熱狂的なデイラン・ファンがいることだ。確かに、歌詞のみに惹かれなくても、メロディ、ライブ・パフォーマンスの魅力など、デイランに惹かれる多くの要素がある。しかしここではそ

の歌詞に注目し、コトバの壁を越えて世界中の人を魅了する力があることについて少し考えてみたい。

英語を母国語としない方には、テイランの歌詞を理解・把握するにはいくつもの「壁」がある。一般的にいえば、何かを「翻訳」するときは、いくら「意味」を直訳しても、そのことばの響きや連想されるほかの言葉や印象は伝わらない。もちろんこれは英語だけの問題ではなく、どの言語でも「翻訳」されるときには同じことである。日本語の川柳や和歌を英語などに訳しても、その音声や流れ、コトバ遊び、などは伝えられない。たとえば、「松」と「待つ」を掛けて詩を作成すれば、その連想や響きはなかなか他の言語では伝わらない(実際には、英語の「松の樹」としての pine と、動詞の「恋親しむ」の to pine は同じよう重複しているが、これはまったく偶然であり、なかなかこのような事例はない)。テイランの歌詞も同じである。その表面的な意味を日本語にしても、多くのニュアンスや連想されるイメージや意味が伝わってこない。

簡単なことからいえば、コトバに「響き」があり、その「音」が歌詞を促がしていることがある。もともと有名なものとして、“Mr. Tambourine Man” (Bringing it all Back Home, 1964) では、「サ行」(“s”) を繰り返すだけ (“silhouetted by the sea, circled by the circus sands”) によって、歌詞の盛り上がりを感じさせる。さらに難しさを増すこととして、多くのテイランの歌詞には、

英語としても説明しきれない「意味不明」なものが少なくないということがある。それはコトバの表面的な意味だけではなく、そのコトバが思い起こさせるイメージや感情などが秘められているからである。たとえば、“Visions of Johanna” (Blonde on Blonde, 1966) に名セリフとして、“the ghost of electricity howls in the bones of her face”とあるが、「顔の骨で電流の霊(影)が叫んでいる」と訳しても、理屈として説明できない。しかし、イメージとして強烈な印象を与えるものである。

また、もうひとつの例として、“My Back Pages” (Another Side of Bob Dylan, 1964) と真心ブラザーズのカバーをみてみよう。このカバー曲がテイランの映画 Masked and Anonymous (2003) の冒頭に突然流れてきたとき、多くのひとが驚いたに違いない。英語圏の方はおそらく何語か分からず(日本語か、中国語か、韓国語か?) 不思議に聞こえたに違いないが、“My Back Pages” のカバーであることはすぐ気がつく。さて、“My Back Pages” のオリジナル歌詞が、非常に説明しにくい、抽象的かつ具体的なイメージの連続や、一見関係ない言葉の羅列のようであることはよく知られている。一節のみ見れば、このとおりである。

Half-wracked prejudice leaped forth

“Rip down all hate,” I screamed

また、テイランの歌詞で面白いのは、矛盾だらけのところがあることである。「Trust Yourself」(「自分を信用せよ」 Empire Burlesque, 1985) という歌もあれば、後には「自分の「良心」は墮落しているの、信頼すべきな」というセリフがある(“Man in the Long Black Coat”, Oh Mercy, 1989)。名曲 Every Grain of Sand (二〇〇一年に浜松で披露) 周りの観客はこの歌を知らなかったせいかざわついたが、今回の名古屋公演でまた歌ってくれたことは、私にとって感無量だった) では、「Like every sparrow falling, like every grain of sand」という歌詞がキリスト教の『聖書』を引用し、神様が細かくわれわれを見守っている(小鳥が空から落ちることも、砂浜の砂の数も知っている) ことへの篤い信仰を表している。他方、最近の“Aint’ Talkin’”(Modern Times, 2006) では逆のことを描写している。

As I walked out in the mystic garden

On a hot summer day, hot summer lawn

Excuse me, ma’am I beg your pardon

There’s no one here, the gardener is gone

神祕の園で歩きまわった。

暑い夏の日、暑い夏の芝生だった。

ごめん、申し訳ないが、

ここには誰もいない、管理人はもういないのだ。

ここでは、われわれを助けてくれる「神」(あるいはなにかの「責任者」といったようなものは頼りにできない、と注意している。結局、「俺に手助けを求めんな、俺も溺れかけていることが見えなうのか」(“Don’t reach out for me, can’t you see I’m drowning too?”, “High Water (for Charlie Patton)”, Love and Theft, 2001) とまで訴えている。テイランはいろいろと示唆してくれるが、「救い主」ではなう。

「救い主」ではないといっても、テイランの歌詞に「預言者」的な様相があることは以前から指摘されている。「フォークの神様」のイメージが消えないのもこのためであろう。「預言」とは未来を予測するのみではなく、時期と文化を超えて意味をなすコトバであり、発言されたコンテキストとまったく別な時間や状況に当てはまることがある。一つだけ例をあげれば、六〇年代を代表する名曲“The Times They are A-Changin’”(1964) はその時期の米国社会を描写しているが、“Come senators, congressmen, please heed the call. Don’t stand in the doorway, don’t block up the hall” (「国会議員たちよ、よく聞け。出入り口に立ったり、廊下を塞いだりするな) を聞くと、なんとなく最近日本の議会で議員たちが国会の審議を防ぐために委員会の入り口やその廊下などを身を張って塞いでいる様子が浮

かんでくる。また「Blowin' in the Wind」(風に吹かれて、The Freewheelin' Bob Dylan, 1963)などは、戦争のむなしさや自由への憧れを訴え、時期や文化を超越する「預言」的普遍性をもっている。

しかし、ディランの歌詞は暗くて、重苦しいものばかりではなす。昔々「Leopard-Skin Pill-Box Hat」(Blonde on Blonde, 1966)で相手のファッションを通して茶化したり、「Talkin' Bear Mountain Picnic Massacre Blues」(The Bootleg Series Vol. 1, 1962, 1991)で「ある「事件」をおもしろおかしく物語としてとりあげたり、結構ユーモアにあふれた歌も少なくない。最近では、ディランでないと許せない「親父ギャグ」としかいえない(駄洒落が飛び出している)。「I'm sitting on my watch so I can be on time」(「Bye and Bye」, Love and Theft, 2001)。「Man says, 'Freddy!' I say, 'Freddy who?' He says, 'Freddy or not here I come」(「Po' Boy」, Love and Theft, 2001)などは「訳しようがない」。「時刻どおりにするために、時計のうえに座っている」と直訳しても、「何のこっちゃ」としかいえない。「時刻どおり」の on time と、「時計の上に座る」の on をかけたと説明しても面白くないと思われるが、英語で聞くとなんとなく愉快な感じがする。このドライなユーモアは、ディランが DJ として活躍している「Theme Time Radio Hour」でも見事に活用している。「コトバ遊び」にはいろいろあって、このような愉快な遊びも

ディランの魅力のひとつである。

とにかく、今回の日本公演で強く感じたのは、ディランを体験するためには必ずしもそのコトバを理解する必要はない、ということだった。強烈な演奏と、細かく聞き取れなくても波のように寄せてくるセリフ。葬式や法事で、「般若心経」などを唱えるときは、そのコトバの意味や内容が細かく分からなくても、儀式・パフォーマンスとして充分意味を成すものである。今回のディランのパフォーマンスも同じだった。ただ、ディランをより深く味わうためには、やっぱりその歌詞が重要であり、いろいろと学べることや楽しめることが秘めてある。日本のファンにも是非言語の壁を乗り越えてディランのコトバに注目し、その世界を味わってほしい。

(Paul Swanson・宗教学)

